清川村立緑小学校

研究テーマ：「自立・協働・創造」　～清川村から羽ばたく児童の育成～

１　実践の目的

本校の学校教育目標である、「自ら立ち、他者を認め、未来を創る児童の育成」を達成するために、今年度は児童に自ら考え行動するといった力や他者と協働して、新たな考えを生み出したり創り上げていったりする力を向上させていきたいと考えた。そのために、単級（少人数）で人間関係が固定化されている今のままでの児童の関わりから脱却し、より大きく成長させるため、多様な他者と交流する機会を増やしてきた。具体的には、異学年との積極的な交流や他校との交流や地域との交流である。そして、単に交流して終わりではなくアウトプットする機会も増やした。そして、自己を客観的に見ることや他者からの視点を大切にして研究を進めてきた。

２　実践の内容

（1）校内研究の体制

校内研究推進委員会により、研究の方向性や具体的な取組を協議した後に、全体会にて共有を図り、全職員が同じ意識で研究に取り組めるようにしてきた。年間５回の授業研究では、講師に桜美林中学校・高等学校の川原田康文先生をお招きして、予測困難な時代を生きていくためには教員も児童もどんな力を身に付けていく必要があるのか具体的にアドバイスをいただきながら取り組んできた。

（2）研究授業・研究協議の様子

低学年は、生活科の授業において小グループで話し合うことを通し、他者と協働することで新たな考えを作り出したり、新たな気付きを得たりすることができることを経験してきた。中学年は年間を通して合同で体育を行った。授業研究ではゴール型ゲーム「ザースボール」を行い、体育の目標を達成しつつも、異学年でのチーム作りから、ルール構築や作戦会議等を児童が主体的に行うことで学びを深めた。高学年は学校全体に関わる行事の企画や運営を中心となって取り組むことによって、自分事として考える機会を多く設けた。また、中心となって活動することによってリーダーシップを発揮する場面も見られるようになった。これまでは、異学年交流行うときには低中高の枠組みで行うことが多かったがその枠組み超え、４・６年生が理科の合同授業を行うなど、様々な学年で交流することの良さも実感することができた。

今後は異学年の交流において、振り返りの更なる充実と児童自身の成長の実感を伴わせていき、児童が自らの成長を実感できる機会を提供していきたいと考えている。

３　実践の成果

本校ではこのテーマでの取組は１年目ということで、様々なことに挑戦してきた。全校児童集会では、今までは各学級で出し物を考えてきたが、今年度は縦割り班によって出し物を考え、練習をして発表を行った。学級が違うことによってコミュニケーションを取ることの難しさや性格や、人柄をあまり知らない他者と協働をしていくということに戸惑いを感じながらもそれを経験することによって、児童は大きく成長することができた。

異年齢集団で活動することのメリットとしては、発達段階が違うということをお互いが意識して、相手の良い部分や苦手としている部分を尊重するという他者理解ができるようになっていくことである。今年度の全校児童集会では、そのメリットを大いに感じ取ることができた。また、普段の異学年での授業交流においても上学年が下学年に丁寧に教える姿が見られたり、下学年は上学年の良い姿を見て、学び実践するようになってきたりと、異学年交流が大きな効果をもたらせていると感じる。

しかし、これらの取組というのは１年間行っただけでは身に付いていくものではないと感じている。したがって、今後も継続して取り組んだり手法を変えながら取り組んだりしながらより児童にとって効果的な方策を探っていきたいと考える。

４　今後の展開

児童数の減少は今後も見込まれ、ますます小規模になっていくということを鑑みると、来年度以降も積極的に交流活動を行っていきたいと考えている。今年度は、主に校内を中心とした交流活動に力を入れて取り組んできた部分があるので、次年度以降は他校との交流も増やして、全く知らない他者との協働を行ったり、新たな気付きや発見をしたりしていって欲しいと考える。

校内においては、今年度の取組を軸として行い、今を見るのではなく数年後を見据えて児童がどのような成長を遂げているとよいかというビジョンを教員が明確にもちながら接していきたい。今取り組んでいることが断片的ではなく持続可能で、上学年から学んだことを今度は下学年が上学年となったときにリーダーシップを発揮できるようになり、それが良いサイクルになっていくような仕組み作りにも努めていきたい。